

空



2015・8

**SORA** 62号

五十句

柴田 佐知子

径幅を鎌で広ぐる半夏生

蛞蝓の多分急いでゐるらしき

山見えぬ街となりたりソーダ水

抜襟の女通して水を打つ

金魚見る金魚のやうな女の子

二人てふ気まづき間あり青林檎

勉強と言へば盛夏の暈の間

水虫も軍靴も父と共に消ゆ

—『俳句』七月号より—

通されて深山のごとき夏座敷

五月雨や竹あるかぎり竹の節

風鈴のほかは加へず母の部屋

水遊び水ちらかしてみな消えし

ため池の水嵩増して漆咲く

雨の山引つ張り進む蝸牛

著莪の花おほかた暗き修験道

瀧の中骨あらはなる修行僧

仮の世へ仮の貌出す墓

行者ごと灼けて岩場のそそり立つ

郭公や疲れを知らぬ峰ばかり

冥途よりこの世暗しと蟬しぐれ

歴史また戦史山椒魚の四肢

荒縄のどすんと届く祭前

すててこの脛より父の老いて来し

髪結うて首折れさうな祭の子

団扇もて男を打ちて行き過ぐる

後の世はすぐそこの世ぞ青簾

しやがむ子に蟻も地べたも限りなし

かき氷舌が縮んできたりけり

遠泳につきゆく船の見ゆるのみ

—『俳句界』七月号より—

職人の利き腕に夏来りけり

子燕の粒揃ひなる頭が並ぶ

虫干の衣分け入れば母が居り

米櫃に炎天を来し米を足す

這うてくる子が真赤なり貝風鈴

声の主夏草分けて出できたる

何もかも引きずり下ろす瀧の音

大瀧を離れ生身に戻りけり

百畳に風の道ありほととぎす

竹を編む奥に立てある竹婦人

干魚の眼くぼめり土用雲

謝れば済むことなのに草の笛

見なれたる海を見に行く藍浴衣

ここ踏めば必ずきしむ盆の家

茄子の馬夜は畦道を歩きをり

送り火の消えたる汐の匂ひかな

―「俳句四季」八月号より―

河原にて磨く神馬や秋の雲

竹山を斜めにのぼり竹を伐る

七夕竹伐り出す竹にぶつかりつつ

礼服は奥に吊るされ雁渡し

杖に身を預くる母や鳥渡る

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

折れさうに眠る学生梅雨に入る

イルカ跳び人よろこばす涼み船

横顔に不実のありて水中花

夕焼へ舳先廻るやイルカ蹠き

かけ声のうねりとなりて夏祭

烏瓜絡み咲く坂チャペル見ゆ

風鈴を吊して父の話し出す

どの薔薇も名を得て匂ふ弥撒の鐘

夕立のあとの大きな水たまり

シスターの衿のやうなる花海芋

息止むるごと噴水に間のありて

薔薇の風呂からだ竦めて沈みけり

来年は崩す納屋より夏燕

矢印は鍾乳洞へ路炎ゆる

抜け道の今は夏草茂るのみ

夏帽子外し地底のこゑ聴きに

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

新漁港と呼べど古りけり棕櫚の花

海苔簀にひねもす巨船ゆきかひぬ

登四郎忌松に潮風真横より

墓の背に長命水となりし雨

夫とみてちちはは恋し螢の夜

天領の夕べ縦横蚊食鳥

梅雨に入る防空壕に千羽鶴

火蛾となり大きく舞へりシテの前

梅は実に朧かたく修道院

ミスト撒く下をゆきかふ巴里祭

産婆とふ朽ちし看板花みかん

とつかり失せしねぢ山日の盛り

窯出しを待つ瑠璃のこゑ聞きながら

人生の最強の時サンドレス

箱庭に置きたしちちの蓄音機

夏風邪とおもふ片目が二重なら

福岡 柴田志津子

この線路ゆけばふるさと旧端午

訪へばまづ牛が貌出す花みかん

鉛筆を削りしころの釣忍

鶏小屋の尺余の天地炎暑来る

仏壇にをさまる西瓜買ひにけり

老いたれば手拍子のみの盆踊

南瓜畑荒らして裏山の猿が在らすと

村芝居まづは受け取る下足札

福岡 だいじみどり

リユツクより長い顔出す新ごぼう

抜かず置くはつきり草と判るまで

飛び出して雨にぬれたる夏芽かな

土砂降りに身も世もあらぬ合歡の花

さて立夏夜明けの窓を開け放つ

父子三人それぞれの捕虫網

見て見ると虫籠の中の飛蝗

三人のひとりに聞え蟬の声

福岡 岸 洋子

(野上香改め)

北九州 深川 淑枝

夫の忌も妹の忌も遙かほうたる

葦の間に乗り捨てし舟行々子

少し屈み髪の蛸をはづし合ふ

川舟の棹座の擦れや麦の秋

転びても握りし蛸はなさざる

向き替ふる時花藻打つ鯉の鰭

葉の裏のでで虫に雨上りけり

鶺鴒の声して夕沼の匂ひたる

枇杷熟るる昔の道はよく曲り

藻畳の下くぐる波更衣

風鈴を風の道まで提げてゆく

山藤のいろ夕雲に移りたる

発車ベルことば涼しく別れけり

滾る湯のしづかさ而降る竹落葉

老眼を凝らす水中花片開き

木雫の音の間遠に青簾

兵 庫 戸 栗 末 廣

たんぽぽの絮飛ぶ上りホームかな

岬へと水脈まつすぐや更衣

漂へるものに水母と昼の月

飛魚や島に風力発電所

サングラス外し口止めされにけり

くちなはのゆつくゆ消えし寺の昼

山墓の小さきは埋れ夏うぐひす

杉の皮山と積みある芒種かな



空作品抄  
柴田佐知子抽出

青あらし早瀬は穢れ寄せつけず

水筒のさいご逆さに雲の峯

羽抜鶏盗人歩きに小屋を出る

存分に恨みを晴らす夏芝居

灯を消してぐらり漕ぎ出すほたる舟

雛鶏に序列のできて芹の花

炎昼や天地無用の荷が届く

鬼灯やゆつくり母になればいい

森林の空に道あり夏の蝶

姿見の水着姿に後退る

田を植ゑて水の景色のきのふけふ

笑むやうに割るる揚げ菓子夕薄暑

原 友子

”

深川 淑枝

高倉 和子

永淵 恵子

宮井 知英

柴田志津子

あさなが捷

戸栗 末廣

小林 朱夏

松田 明子

苑 実耶



日に一つかたづけてゆく涼気かな

老萬里泳ぎても此処金魚玉

夏芝居化身に速き付拍子

天上へ座を移したる母の夏

ほたる舟一番星へすべり出す

日の落ちて踊櫓が聳え立つ

生き物の影も引き込む青葉闇

研ぎあげし庖丁翳す夏はじめ

夏蝶のもつれてあがる壇の浦

掬はるる金魚の貌の歪みけり

にぎやかに来て黙りぬる滝の前

農夫ひとりトラック一台麦の秋

鳥の巣を狙ふ姿に蛇の衣

存へてはらから集ふ夏座敷

雨だれのいつしか途絶え雲の峰

矢野百合子

栗原京子

秋 千晴

山本則男

千波 悠

吉田 菫

押田裕見子

田岡千章

田中とし江

井上和子

天谷翔子

古川夏子

山内 碧

野畑さゆり

今井春生

夜の新樹白鷺城の浮き立てり

苔茂る神樹にもたれ相思仏

三人の吾子のへその緒さくらんぼ

裾さばくごとき波音燕子花

道譲る右も左も水芭蕉

白シャツに庖瘡の痕隠しけり

ビル街に金銀尽くす飾り山笠

をさな児の裸天使のかたちして

銜へ来し蟬まだ動く三和土かな

詩集読むやうに紫陽花園巡る

花満開花に見られて歩きけり

身を灘へ投げだすやうに袋掛

大富士の裾をはみ出す代田かな

鳴き尽くし水を飲みけり羽抜鶏

看護師に身を支へられ更衣

林 徹也

清水 量子

田代 貞枝

森 俊 人

白水 良子

山田 正子

西住 三恵子

仲里 奈央

亀井 紀子

青木 朋子

織田 高暢

吉村 摂護

松本 司

横田 敬子

長末 不断



花の山ぐるりと廻る万歩計

友逝きてうつろなるまま薔薇活くる

手入れせぬ庭の莽まう走り梅雨

緑陰をたどりて木曾の宿場まで

工場の朝のサイレン夾竹桃

どうしやう巣穴に蛇の尾が垂れて

涼風やミシン踏む音軽やかに

峰雲に煙突二本突き刺さる

狛犬の口中暗し青葉冷

若鮎の跳ねる形に焼かれけり

夏野行く巡拝団の網代笠

子と共に絵本も眠る団扇風

梅ジャムの鍋出来上がる音となる

神苑の菖蒲田音を遠ざけし

地球史にありし氷河期かき氷

田坂能雄

小川涼

田代民子

遠山のり子

えとう樹里

橋本知笑

植田洋子

立花一枝

石川叔子

酒井みち子

三輪敏夫

荻悠子

山口弘子

村上二三

小谷一夫

子が摘みし一口ほどの土筆和え

黙禱の静寂をつつむ蟬時雨

那智の滝祈る高さにあるにけり

谷戸ふかく一軒の家花石榴

麦秋や町の名旧き道しるべ

梅雨晴間船白じろと進みをり

鬼ならば赤青どちら夏の月

日曜日冷房きかせ孫を待つ

法要の声すみわたる青山河

万緑や鎖して隙なき秘仏堂

ふじの茜

上川いつ子

岡村尚子

わたなべ漣

田口萬智子

田邊豊子

犬丸勝子

井上義郎

川崎よしみ

森真二